



実践報告Ⅰ 立浪 佐和子 (たちなみ・さわこ) Sawako Tachinami

横須賀美術館主任学芸員

金沢美術工芸大学大学院芸術学専攻修了。2005年より横須賀美術館学芸員。展覧会事業のほか、特別支援学校・学級の受け入れプログラム、横須賀市点字図書館への出張鑑賞会など福祉関連の普及事業を担当している。



実践報告Ⅱ 岩井 成昭 (いわい・しげあき) Shigeaki Iwai イミグレーション・ミュージアム・東京主宰

国内外の特定地域における環境やコミュニティの調査をもとに多様なメディアで作品を発表する。1990年代という早い時期から多文化状況をテーマにおき、2011年からはプロジェクトベースの「イミグレーション・ミュージアム・東京」を主宰。その一方で、拠点を秋田におき、秋田公立美術大学の大学院「複合芸術研究科」の新設に参加したほか、同地で「辺境芸術」を標榜するなど、さまざまな活動を並行して進めている。美術家。秋田公立美術大学教授。



実践報告Ⅱ 小林 絵美子 (こばやし・えみこ) Emiko Kobayashi

藤沢市アートスペース学芸員

2008年多摩美術大学美術学部絵画学科日本画専攻卒業。2010年より藤沢市民ギャラリーに勤務。藤沢市アートスペース開設に伴い、立ち上げに携わる。2015年より現職。湘南ゆかりのアーティストの展覧会やワークショップ等を多数企画。



実践報告Ⅲ / モデレーター 荒木 夏実 (あらかき・なつみ) Natsumi Araki

東京芸術大学美術学部准教授

慶應義塾大学文学部卒業、英国レスター大学ミュージアム・スタディーズ修了。三鷹市芸術文化振興財団、森美術館キュレーターを経て現職。主な展覧会に「ゴー・ビトゥーンズ展：こどもを通して見る世界」、「ディン・Q・レ展：明日への記憶」など。東京芸術大学美術館では11人の女性アーティストによる「彼女たちは歌う」展(2020)を開催、アーティストたちとの議論をウェブマガジンに連載中。https://listen-to-her-song.geidai.ac.jp/



実践報告Ⅳ 竹内 利夫 (たけうち・としお) Toshio Takeuchi

徳島県立近代美術館上席学芸員

京都工芸繊維大学大学院工芸学研究科意匠工芸学専攻修了。1990年徳島県立近代美術館オープン時より同館に勤務。主に版画・デザイン関係の展示を担当。近年は、誰もが楽しめる鑑賞プログラムの開発と、ユニバーサルミュージアム事業に力を注いでいる。



総括鼎談 広瀬 浩二郎 (ひろせ・こうじろう) Kojiro Hirose 国立民族学博物館准教授

自称「座頭市流フィールドワーカー」、または「琵琶を持たない琵琶法師」。1967年、東京都生まれ。13歳の時に失明。筑波大学附属盲学校から京都大学に進学。2000年、同大学院にて文学博士号取得。専門は日本宗教史、触文化論。01年より国立民族学博物館に勤務。「ユニバーサル・ミュージアム」(誰もが楽しめる博物館)の実践的研究に取り組み、「触」をテーマとする各種イベントを全国で企画・実施している。『目に見えない世界を歩く』(平凡社新書)、『触常者として生きる』(伏流社)、『それでも僕たちは「濃厚接触」を続ける!』(小さ子社)など、著書多数。



総括鼎談 ジュリア・カセム Julia Cassim 京都工芸繊維大学 KYOTO Design Lab 特命教授

マンチェスター・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン及び東京芸術大学で美術を学ぶ。インクルーシブ・デザインの国際的権威。1984年から1999年まで、ジャパントイムズ紙のアート・コラムニストとして活動すると共に、視覚障害のある観客向けの展覧会をキュレーションし受賞。2000年にはロイヤル・カレッジ・オブ・アート(RCA)の「Helen Hamlyn Centre for Design」に参加し「Challenge Workshops」(障がい者とデザイナーが一緒にデザインを考えるプログラム)を実施。これは2010年のビクトリア&アルバート博物館の展覧会の主題であり、Design Week誌により、その年のデザイン界に最も影響を与えた50名に選出された。2014年5月より京都工芸繊維大学の特任教授に就任し、KYOTO D-Labを設立。



実践報告Ⅱ / 総括鼎談 水沢 勉 (みずさわ・つとむ) Tsutomu Mizusawa

マルパ実行委員長 / 神奈川県立近代美術館長

1952年横浜生まれ。慶應義塾大学で修士号を得る。ウィーン世紀末、とくにエゴン・シーレを研究。1978年神奈川県立近代美術館の学芸員。2011年以後、同館館長を務める。モダニズムの多様性を世紀転換期以後の日本・ドイツ語圏の近現代芸術に探る展覧会を企画。著作に『この終わりのときにも 世紀末芸術と現代』(思潮社、1989年)など。